

2020年9月20日

清らかな目

年間第25主日です。今日のマタイ福音書では「ぶどう園の労働者のたとえ」が読まれます。第一朗読イザヤの預言の「わたしの道は、あなたたちの道をわたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている」（イザ55・9）という表現が、たとえ話を読み解く鍵になっています。神の思いと人間の思いとに、どんな違いがあるのでしょうか？ まず、人間社会の正義を考えてみましょう。たとえば、誰よりも先に朝早くから働き、遅くまで働いた人が受け取るものは大きく、それよりも後に働きはじめた人の受け取るものは少ない、というのが人間社会における正義とってよいでしょう。マタイのたとえ話は、決して人間社会の正義を否定するものではありません。しかし、人の思いをはるかに超える神の思いがあることを読者に告げようとしています。

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。」（マタ20・1）

マタイのたとえ話は「ある家の主人」がさりげなく、夜明けに出かけて行く場面からはじまっています。それは、最も働いている者は誰か？ という問いを読者に投げかけます。主人はその後、十二時、三時、さらに五時に出て行き、休む間もなく仕事のない人を見つけては「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」（マタ20・6）と尋ね「あなたたちもぶどう園に行きなさい」（マタ20・7）と呼びかけます。まぎれもなく、最も働いている人物は、ぶどう園の主人なのです。

ところが、夜明けから働きはじめた労働者は、自分たちこそ一番よく働いたと思い込み、五時に雇われた人たちが自分たちと同じ給与であることに不満を覚え、批判的なまなざしを向けています。「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした」（マタ20・12）。ぶどう園の主人は「わたしの気前のよさをねたむのか」（マタ20・15）と夜明けから働きはじめた労働者が「ねたみ」（envy）の心を抱いていると気づきを与えます。

ここで「ねたみ」と訳されていることばの意味について考えてみましょう。

原文の直訳は「あなたの目が悪くあるのか」であり、他のねたみの説明ではラテン語のインヴィディア（invidia）「横目で見ると、不審の目で見ると」（出典：ジ

ジョン・A・ハードン（1980）『現代カトリック事典』エンデルレ書店）が思い浮かびます。同じマタイ福音書6章では、さらに印象深く「悪い目」「濁っている目」が及ぼす深刻な影響について説明されています。

「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁ってれば、全身が暗い。」（マタ6・22）

わたしたちは神の思いによって、清らかな目、澄んだ目になるように求められています。神の思いは——すべての人を最後の瞬間まで救いたい——という切実な願いです。夜明けから日没まで、長く働いたか短く働いたかは度外視です。恵みの内に与えられた人生において「何もすることがない人々」がいることは、神にとっては耐え難いことであり、一人でも多くの人とぶどう園で働く喜びをともにしたいのです。

菊地大司教さまは、9月14日付で新しいメッセージ「教会活動の制限緩和について」を発表されました。ミサ参加のための年齢制限（75歳）は9月19日以降、行われません。敬老の日を前に、大司教さまの発表をお伝えできることを喜んでいきます。みなさまのご理解とご協力に心から感謝申し上げます。コロナ対策は、まだ続きます。困難の中にも、神の思いに従って、いつも健全な心、澄んだ目で世界を見つめ、日々の生活を感謝と喜びの内に過ごすことができますように。

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第25主日聖書朗読箇所：

- ① イザヤ55・6-9 —答唱詩編—詩編145より
- ② フィリピ書1・20c-24、27 a
- ③ マタイ20・1-16